

## 論文内容の要旨（様式4）

報告番号	甲 第 14 号
論文名	<p>学校外食育の指導方法に関する研究</p> <p>A Study on the Teaching Methods of Outside-School Dietary Education</p>
氏 名	坂本 廣子

食育基本法下、学校における食育が学習指導要領、食育指導の手引きに基づいて、その内容と指導方法が厳密に規定されているのに対し学校外における食育は、様々な場所で多様に行われている。本論文は、この学校外における食育の指導方法を対象として、その特質と課題を明らかにすることを目的とした。研究の視点としては、学校外における食育を市民が市民を教育する「公衆教育学」の一部とし、学校外食育という概念を用いた。研究の枠組みとしては、国家間の授業方法の比較研究において、英国のアレキサンダー(Robin Alexander)が用いた枠組みを、学校外食育の状況に合わせて、少し修正したものと、フランス教授学において、例えば、数学の知識は、学校だけではなく、様々な教授学的状況において、問いのあるところに移転して「わざ」となる、という理論を用いた。分析に当たっては、保城広至の「中範囲の理論」を用い、筆者がこれまで行ってきた食育の実践を、料理の知識と技術が移転して「わざ」となる「教授学的状況」ととらえ、それらの「教授学的状況」を、アレキサンダーの枠組みを修正したもの（対象、指導者、空間、課題、活動、相互作用、判断）で分析して、その比較分析表に基づいて、学校外食育の指導方法の特質と課題を明らかにするという方法を用いた。

分析の結果、学校外食育の「対象」は、1歳未満児から高齢者まで、「指導者」も、母親、キッズキッチンの指導者、地域住民、放送番組制作チーム、と幅広かった。「空間（場所）」も、家庭の台所、公共の調理場、料理教室、企業のキッチン、と多彩であった。「課題」は教授学的状況ごとに強調点が異なっていた。「活動」および「相互作用」は、指導者の指導の下で、見よう見まねで料理の実践をするという点は共通していた。「判断」は、それぞれの教授学的状況における実践は食生活者としての自立に貢献している。

学校における食育が系統性を特質としているのに対し、学校外食育は、料理の知識と技術の体験による伝承を特質としている。学校における食育と連携しながら、学校外食育の実践と研究を進めていく必要性と課題があることを論述した。